

佳作

小高地区訪問

福島県二本松市立杉田小学校六年 松本 悠里

私は、今年の夏休み、学校の合唱部の他に、二本松市の小中学生を対象とする、「福島しあわせ運べるように合唱団」に参加しました。

二つの合唱の練習に、夏休みの宿題、コンクール作品、自由研究と、今年の夏は、去年のように、ボーっとしているひまのない、いそがしい夏休みを過ごしたと思います。

夏休みの終わり近くに、震災でひなんしていて、今年の七月に、ひなん指示解除したばかりの小高地区を、合唱団で訪問しました。

小高地区では、班ごとに分かれて、フィールドワークをしました。フィールドワークの内容は、「小高地区で会った人に、質問をする」という内容でした。私は、「ひなん指示が解除されたんだから、人はたくさんいるんだろうな」と思いました。でも、

実際に自分達で、小高地区を歩いてみると、私の考えとはちがいました。車は通っているけれど、道を歩いている人がいませんでした。道も、ほそうされていたはずなのに、何ヶ所かふむと、グニャリとへこむところがありました。

私達の班は、駅に行こうと思ったけれど、道に迷って、どこだか分からなくなり、人に道を聞こうと思いい、人をさがしていました。そのときに、庭の手入れをしていた、大曲さんという人に会いました。

大曲さんに、道を聞くだけではなく、質問をしました。震災があった時のこと。ひなん所のこと。いろいろな質問をしたあと、最後に、こう質問しました。

「あなたにとっての幸せとはなんですか？」

大曲さんは、

「じゅう実した毎日がおくれること。」

と答えてくれました。また、その後行ったとこやのカトウさんに同じ質問をしたところ、カトウさんは、「日常生活がおくれること。」

と答えました。二人と話してみても思ったのは、震災がおこったあと、ひなんなどをした人達にとっては「当たり前」が幸せに感じるんだなと思いました。

その後、ふれあい広場に行き、授業をしました。
授業では、現在の小高地区についての話、小高中学
校の生徒だった人の話、そして、親からの手紙など
がありました。親からの手紙には、震災当時のこと
が書いてあり、私達が忘れていたことも書いてあり
ました。読み終わった後は、みんな、眼がうるんで
いました。

その後、「笑顔のむこうに」「群青」「幸せ運べる
ように」を、小高地区であった人の心に届くように
歌いました。

小高地区に行って、感動したことは、自分達、合
唱団が練習してきた歌をきいて、涙を流す人達がい
る。言葉にするのは難しいけど、自分の心が届いて
いるように感じたことです。

自分達にも、幸せを感じるようにできることがあ
るんだ、ということを感じた一日でした。